

義肢装具製作記録からの情報発信

研究所補装具製作部 中村隆 天野裕子 三ツ本敦子 山崎伸也 三田友記 久保勉 飛松好子

【はじめに】 切断者と義肢に関する疫学調査は我が国では数少なく、ましてや全国規模の調査はない。その理由として切断者の情報は病院に、義肢に関する情報は義肢製作会社に分散し、それらを集約することが非常に困難であることが挙げられる。その点でいえば、研究所補装具製作部は当センター開設当初から、センター内外の障害者に対する義肢装具製作を継続した業務としており、他施設に比べメリットは大きい。今回、補装具製作部内に蓄積された切断者と義肢装具製作に関する情報をデータベース化し、臨床データに基づく切断者と義肢に関する情報発信が可能となったので報告する。

【方法】 “これまで義肢装具士はどのような切断者にどのような義肢を製作してきたか”を主たるテーマとし、1979年7月～2009年3月までの30年間、補装具製作部における補装具製作対象者1270名を調査対象とした。データソースとして以下の3つの記録を使用した。

- ① 補装具製作録：切断者ごとの義肢装具製作記録。切断者の切断部位・切断原因・身体データ(断端長、断端周径など)・義肢製作過程および問題点などを記載したもの。
- ② 補装具診受診録：病院の補装具診に関する記録。入院患者を中心とする記録。
- ③ 義肢装具製作見積書：製作する義肢装具の様式及び使用部品の詳細。

作業はこれらの記録を統合し、各切断者の情報を集約したデータベースを作成した。データベースプログラムはマイクロソフト社製アクセス2003を使用し、切断者ごとの詳細なデータが閲覧できるだけでなく、検索機能により目的とする情報を抽出できるようにした。データベースは厳重な管理の下、補装具製作部のサーバー内のみに保管している。

【結果】 データベースを基に切断者の平均年齢と切断原因・切断部位の調査を行い、研究紀要にて発表した¹⁾。これによれば近年、切断者の高齢化と血管原疾患による切断者が急増し、当センター開設当初と切断者の動向が大きく変化していた。また、義足ソケットの選択因子である断端長や周径変化と切断原因・切断部位等の関係を調べ、断端長による義足ソケットの適用範囲や切断部位ごとの平均断端長や周径変化の傾向を明らかにした²⁾。これらの調査研究では対象者が1000名近い母集団であるため詳細な分析が可能であり、また30年という長期にわたる動向を把握することができた。

以上のように蓄積された情報をデータベース化することで義肢装具士が日常の臨床業務で感じる変化を具体的な数値として情報発信することが可能になった。

【おわりに】 データベースの構築が可能となったのは、義肢装具士の地道な記録の結果である。このような蓄積を継続することで他施設にない独自の情報発信が可能となると考えている。将来的には当センター内の他のデータベースとリンクすることも検討している。

- 1) .中村隆, ”補装具製作部における切断者の調査とその傾向ー義肢装具士の製作記録からー”, 国立身体障害者リハビリテーションセンター研究紀要, No. 28, p. 93-103, 2007.
- 2) .中村隆, 天野裕子, 三ツ本敦子, 飛松好子. ”ソケットの選択に関わる因子”. 日本義肢装具学会学術大会講演集, 25, p. 119, 2009.